

第2章

子ども・子育てを取り巻く現状



第1節 統計データから見る現状

(1) 本市の位置、地勢

本市は、平成13年に田無市と保谷市が合併し、21世紀に初めて誕生する市として新しく生まれた市です。武蔵野台地のおおむね中央にあり、東京都心の西北（北緯35度44分、東経139度33分）に位置し、北は埼玉県新座市、南は武蔵野市及び小金井市、東は練馬区、西は小平市及び東久留米市に接しています。市域は、東西約4.8km、南北約5.6km、面積約15.85km²、標高は最も高いところで67mあり、一般には西から東になだらかに傾斜したほぼ平坦な地域です。

市内には、北部と南部を西武池袋線と西武新宿線が走り、5つの駅が整備されています。さらに、新青梅街道や青梅街道をはじめとする主要幹線道路により、縦横に結ばれています。

>> 西東京市略地図（平成26年3月現在）



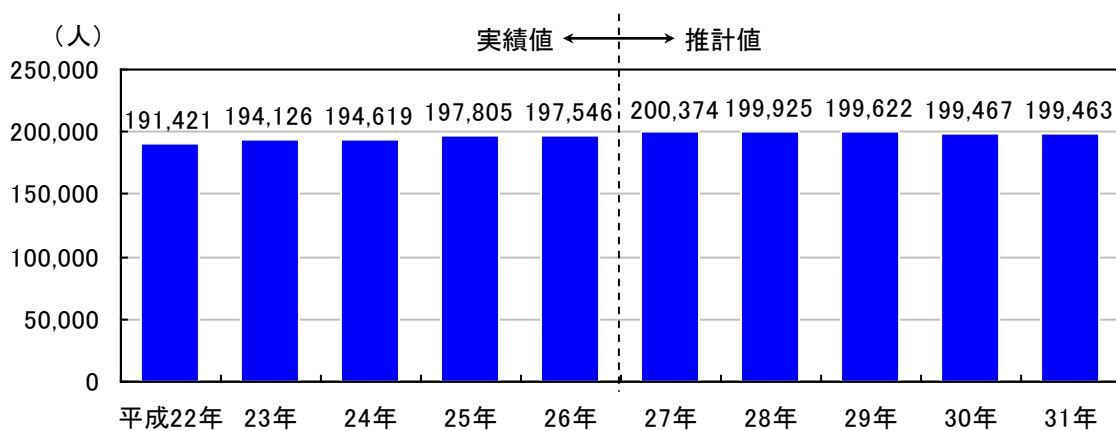
資料:西東京市都市計画マスタープラン

(2) 人口の状況

本市の総人口は、平成 26 年現在 197,546 人で増加傾向を示しています。今後は、平成 27 年の 200,374 人をピークに緩やかに減少していくことが見込まれており、第 6 章「子ども・子育て支援事業計画」の最終年度である平成 31 年には 199,463 人と予測されます。

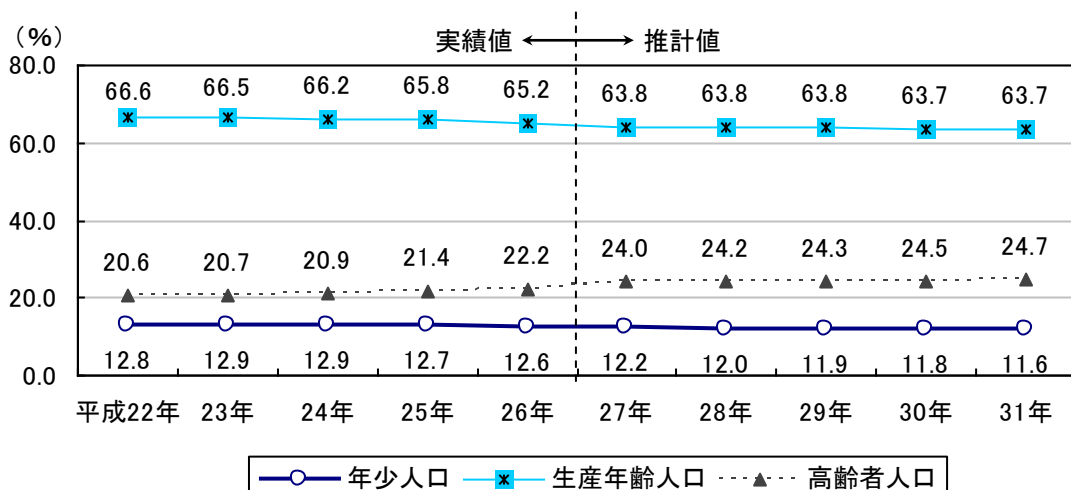
また、年齢3区分別の人口比を見ると、年少人口（0～14 歳）及び生産年齢人口（15～64 歳）は減少しているのに対し、高齢者人口（65 歳以上）は増加しており、本市においても着実に少子・高齢化が進行していることがうかがえます。特に、平成 31 年には、おおむね 4 人に 1 人が高齢者となる見込みです。

>> 総人口の推移及び推計



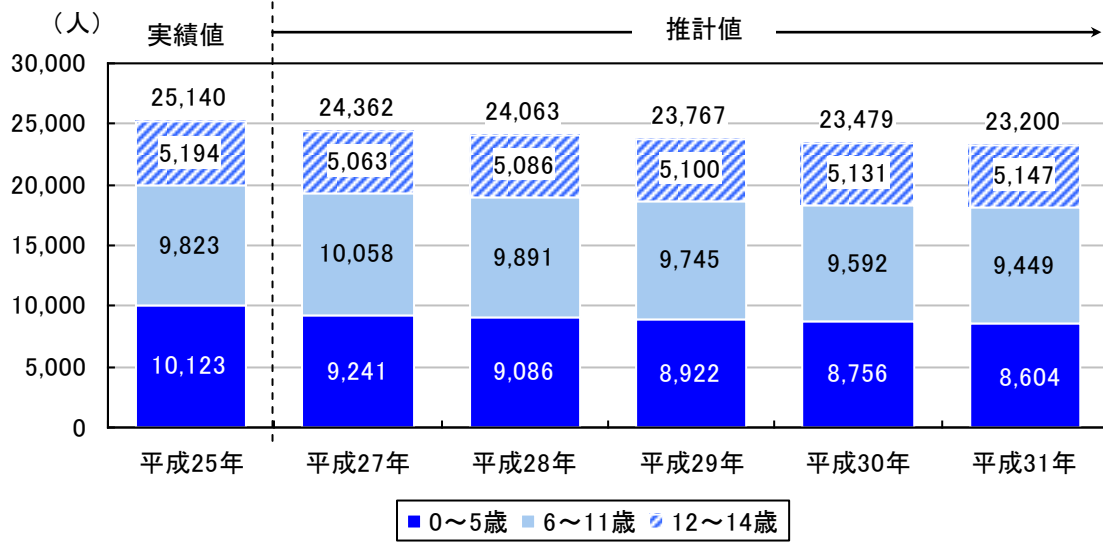
資料:実績値は統計にしよう、推計値は西東京市人口推計調査報告書
※ただし、平成 24 年以前には外国人登録を含まない

>> 年齢3区分別人口比の推移及び推計



資料:実績値は統計にしよう、推計値は西東京市人口推計調査報告書
※ただし、平成 24 年以前には外国人登録を含まない

>> 児童人口の推移及び推計



資料:実績値は統計にしとうきょう、推計値は西東京市人口推計調査報告書



(3) 出生の状況

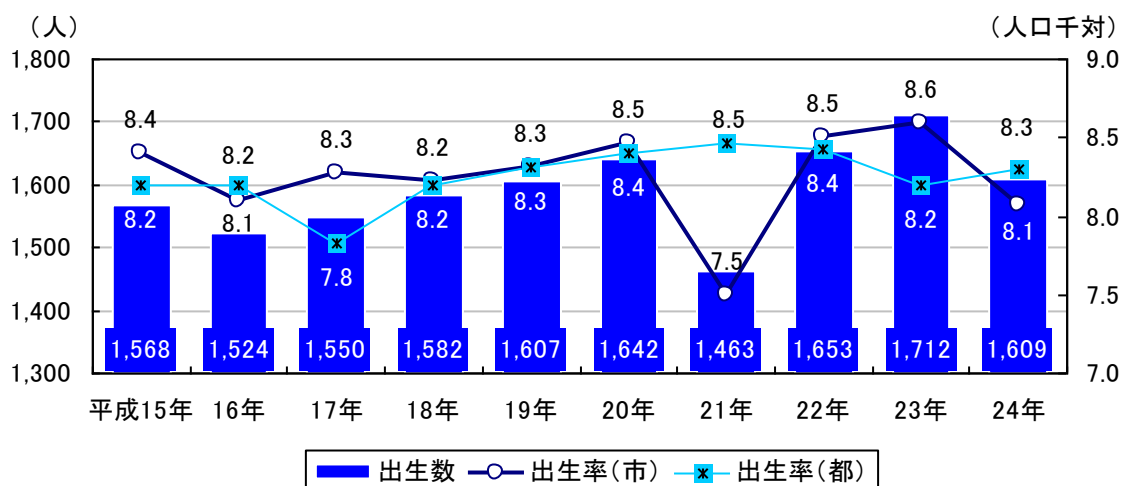
本市の出生数は、平成21年に大きく減少しているものの、近年はおおむね1,600人前後で推移しています。

また、出生率については、平成21年を除き増加傾向で推移していましたが、平成24年は減少に転じており、都の水準を下回っています。

合計特殊出生率^{*}については、平成21年を除き、都の水準を上回って推移しています。

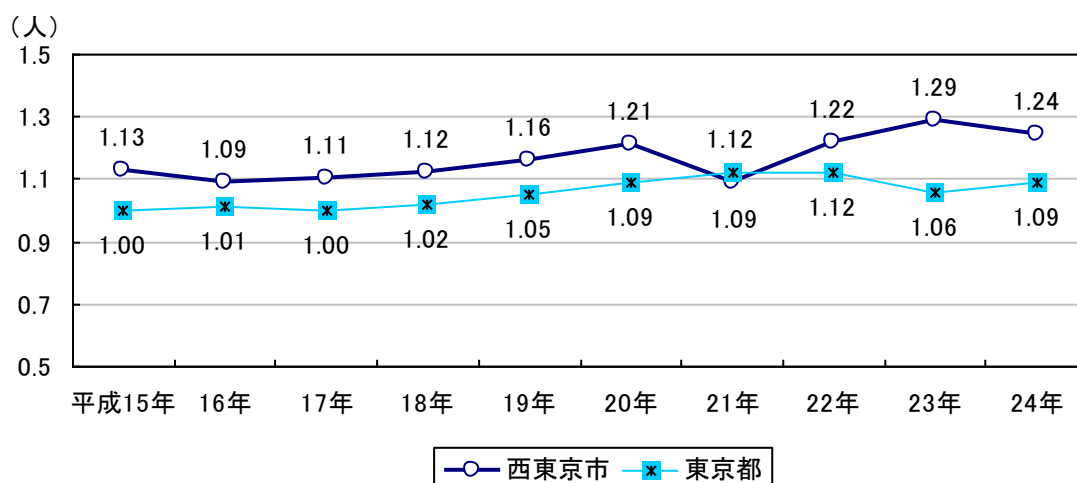
※合計特殊出生率：15～49歳までの女性の年齢別出生率を合計したもので、一人の女性がその年齢別出生率で一生涯の間に生むとしたときの子どもの数に相当します。

>> 出生数及び出生率の推移



資料：東京都衛生統計

>> 合計特殊出生率の推移

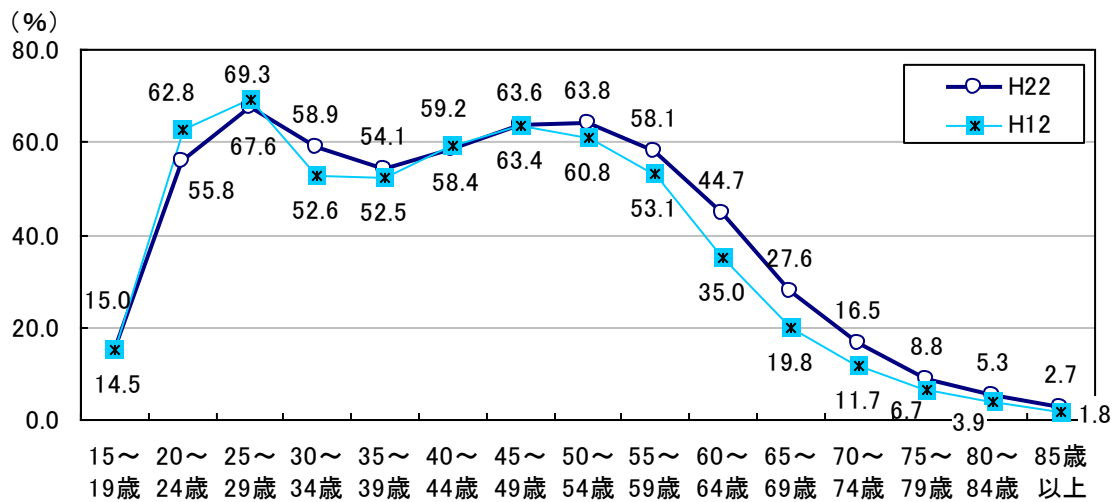


資料：東京都衛生統計

(4) 女性の就労の状況

本市の女性の労働力率（15歳以上人口に占める労働力人口（就業者＋完全失業者）の割合）は、結婚・出産期にあたる30歳代で一旦低下し、40歳代以降再び上昇する状況を描く、いわゆるM字カーブを描いています。しかし、谷の底にあたる30歳代前半の割合はやや改善が見られています。

>> 女性の労働力率の推移



資料：国勢調査

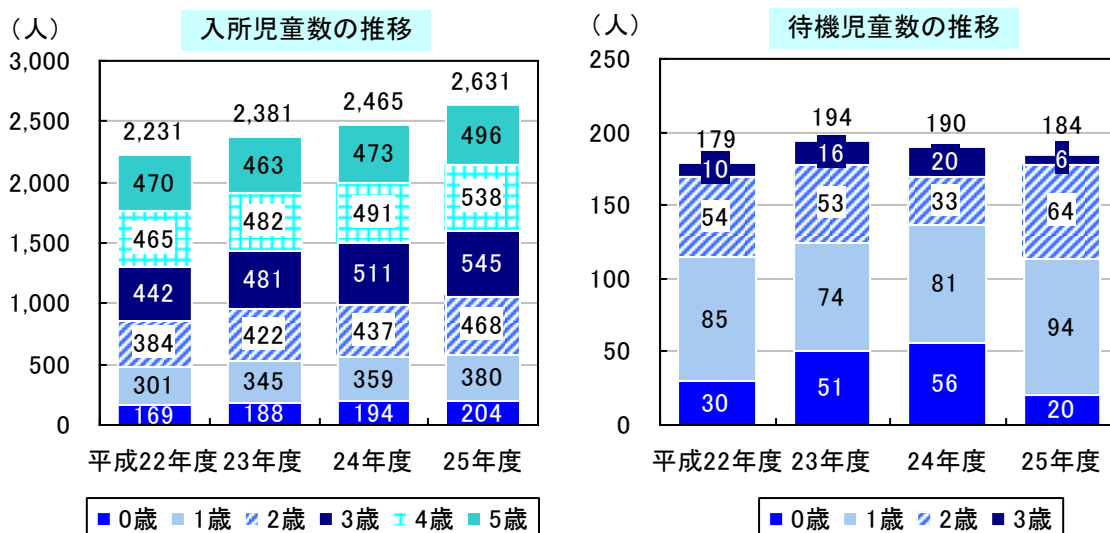


(5) 保育所・幼稚園等の状況

保育所の利用状況を見ると、入所児童数は年々増加しています。特に0～3歳児の伸びが著しく、平成22年度から平成25年度でいずれの年齢も1.2倍以上の増加となっています。

また、待機児童数については、毎年度同数程度でほぼ横ばいとなっています。特に0～2歳児の待機児童が多く、毎年度90パーセント以上を占めています。

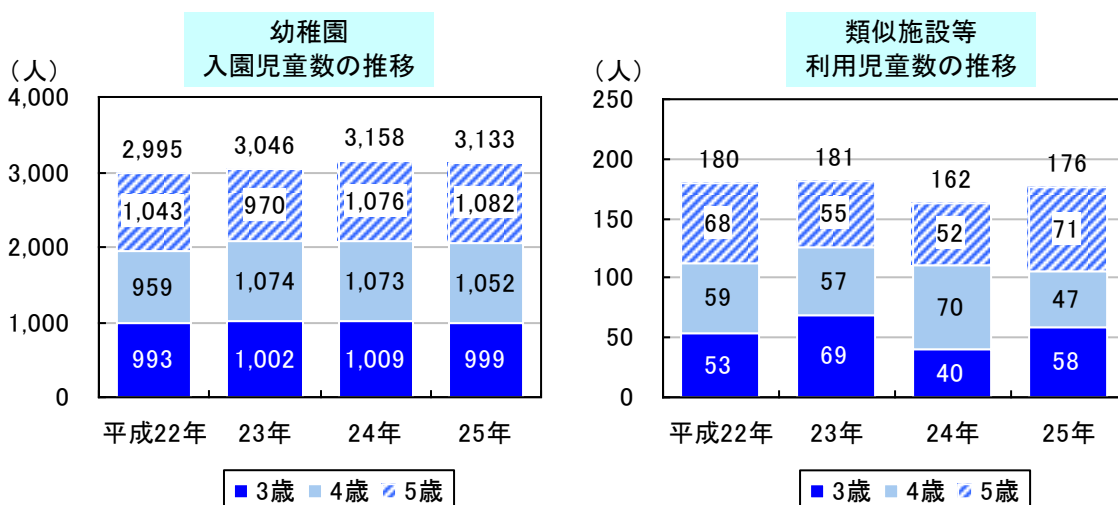
>> 市内の保育所入所児童数及び待機児童数の推移



資料:事務報告書

幼稚園等の利用状況を見ると、幼稚園の入園児童数は年々増加しており、年齢が大きくなるほど利用者が増えていることがわかります。

>>市内の幼稚園入園児童数及び類似施設等利用児童数の推移



資料:事務報告書

第2節 子どもへの調査結果から見る現状

本計画は、子どもの保護者や子どもを支援する方のための計画であると同時に、子ども自身のための計画です。計画策定にあたっては、子どもたち自身が、西東京市や「まち」をどのようにしていきたいのか、また自らの自立についてどのように考えているのかを、知る必要があります。そこで、市内の小中学生を対象に、アンケート用紙を配布し、調査を行いました。

(1) 実施の概要

実施時期：平成26年7月～9月

対象：児童館キャンプ参加者（小学5年生）、市立A小学校5年生、市立B小学校5年生、市立C中学校2年生、児童館・児童センター夜間開館利用者（16歳・17歳）

回答状況：小学5年生177人、中学2年生175人、16歳・17歳55人

(2) 結果の概要

◆子どもの育ちについて

子どもからおとなへと成長していく時期は、自己肯定感や自尊感情が低くなる傾向があります。この時期を乗り越えて、自分の個性を含めて自分自身を認め、自立の思いや行動が子ども自身の成長に合わせて自然にはぐまれていくような環境が必要です。

自己肯定感については、前回の調査に比べ、小学5年生はやや低くなり、中学2年生は高くなる傾向がみられました。

- 前回の調査と比較すると、自分が好きかについて、中学2年生では「そう思う」が増加しているのに対し、小学5年生では減少している。また、「そう思わない」が小学5年生で増加している。
- 自分は人から必要とされているかについては、小学5年生と中学2年生では「そう思う」が1割に満たない。また、「そう思わない」が小学5年生で増加している。
- 自分のことをわかってもらえないかどうかについては、小学5年生と中学2年生では「そう思う」（わかってもらえない）が1割に満たない割合で、前回の調査とおおむね同様である。
- 周りの人と違わないようにしているかについて、いずれの年齢層でも、「そう思う」が増加している。

◆他者との関わりについて

子どもがひとりでいられる時間をつくって、自分自身を見つめたり、ほっとする時間をもたせることも大事ですが、友達や周囲のおとなとのコミュニケーションを通じて、子どもからおとなへの移行が円滑に進むようにサポートすることも重要です。

社会として自立を支えるには、周囲のおとなが、子どもを一人の権利の主体として認め、受け入れることが求められます。

子ども同士の関係について、「楽しくて夢中になれるとき」の回答状況をみると、ゲーム等のひとり遊びが増加はしているものの、友達と遊んでいるときであるとの回答が、前回の調査と同様にいずれの年齢でも最多でした。

- 楽しくて夢中になれるときは、いずれの年齢層においても、「友達と遊んでいるとき」が最も高い。また、「自分ひとりで遊んでいるとき」や「ゲーム」などが、前回の調査結果を大きく上回っている。
- 疲れること、不安に思うことは、いずれの年齢層においても「学校の勉強・宿題」が最も高い。また、勉強や進路、学習に関する内容のほか、小学5年生では「親のこと」や「兄弟姉妹のこと」など家族との関係で前回の調査結果を上回っている。
- おとなにお願いしたいことは、小学5年生では「自分が自由に使える時間を増やしてほしい」、中学2年生では「自分のことは自分で決めさせてほしい」が最も高い。
- 自分や暮らしへの関わり方のうち、「自分で決めたいこと」はいずれの年齢層でも、“友達”、“服装・髪型・ファッション”、“恋愛”のいずれかで、「親やおとなに相談して決めたいこと」には、生活時間や家庭内のルール、家族のイベントなどが挙げられている。

◆市や社会との関わりについて

市の将来を担う世代の、市への愛着を高め、いったんは自分を成長させるために別な場所で暮らすことになっても、いつか帰りたいまちとして選択してもらえるようなまちづくりが必要です。また、子どもが主体的・積極的に社会に関わっていくことに楽しさを見出せるような社会環境づくりが求められています。

まちへの愛着や社会貢献の意識は、年齢によって増減があるものの、約半数が肯定的な回答でした。一方で、「子どもに関わる市の重要なこと」など社会的な事項への決定意欲は、中学生では前回の調査とほぼ同じでしたが、小学生ではやや増加する傾向がみられました。

- 西東京市への愛着は、小学5年生と中学2年生では「好き」が4割半ばから5割強となっている。中学2年生については、前回の調査結果に比べて「好き」が顕著に増加している。
- 西東京市への居住意向は、いずれの年齢層においても「ずっとくらしたい」が3割程度となっている。中学2年生については、「ずっとくらしたい」が前回より増えている。
- 社会に役立つことがしたいかについて、小学5年生と中学2年生では「そう思う」が5割から6割弱となっている。中学2年生については、前回調査より増加している。
- 自分や暮らしへの関わり方のうち、“市の重要なこと”や“お祭りなど地域の行事”などは、「親やおとなに決めてほしい」と考えている人が多い。

第3節 おとなへの調査結果から見る現状

1 アンケート調査から見る現状

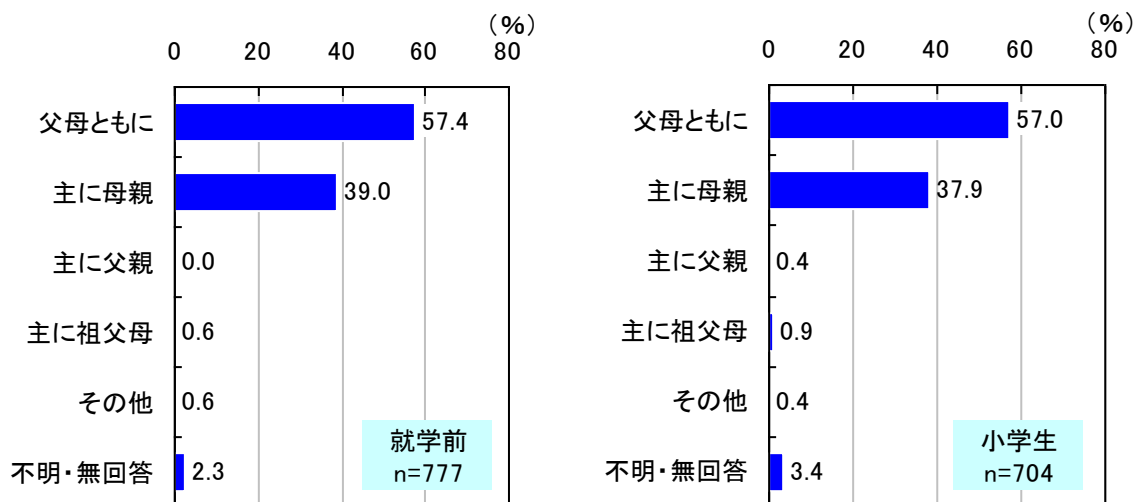
本計画の策定にあたり、子育て中の保護者の生活実態や意見・要望などを把握するため、就学前児童（0～5歳）及び小学生（6～11歳）の保護者を対象に、「子育て支援ニーズ調査」（以下「アンケート調査」といいます。）を実施しました（回収率は、就学前児童 51.8%、小学生 46.9%）。次に、主な結果を示します。

①子育てをしている方について

主に子育てを行っている方については、就学前児童保護者、小学生保護者ともに「父母ともに」が最も高く、次いで「主に母親」で、おおむね同様の傾向となっています。

また、父親が子育てに関わっていない場合の理由を見ると、上位2項目は共通しており、仕事等により多忙であること、子育ては母親が担うものという意識が、父親を子育てから遠ざけていることがわかります。

>> 主に子育てを行っている方【就学前／小学生】



父親が子育て関わっていない場合の理由(上位3項目)

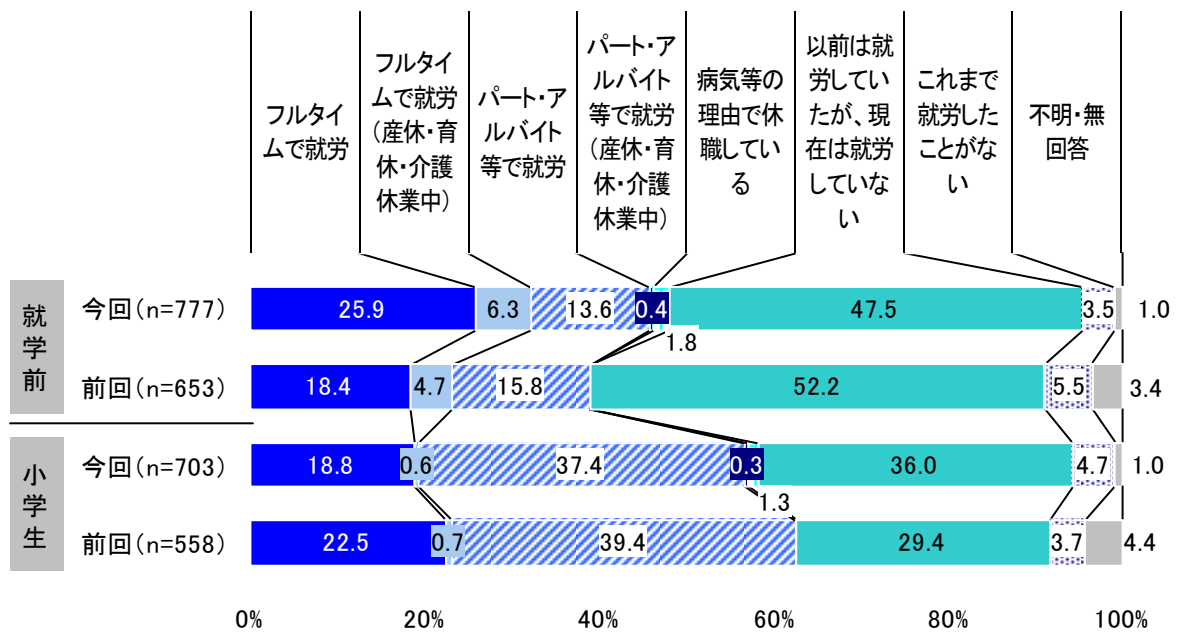
- | | |
|---------------------------------|---------------------------------|
| ①仕事が忙しくて、子育てをする時間が取れないため(82.5%) | ①仕事が忙しくて、子育てをする時間が取れないため(70.8%) |
| ②育児は主に母親がするものと思っているため(12.5%) | ②育児は主に母親がするものと思っているため(13.1%) |
| ③単身赴任などで同居していないため(5.6%) | ③父親がいない(11.2%) |

②保護者の就労状況について

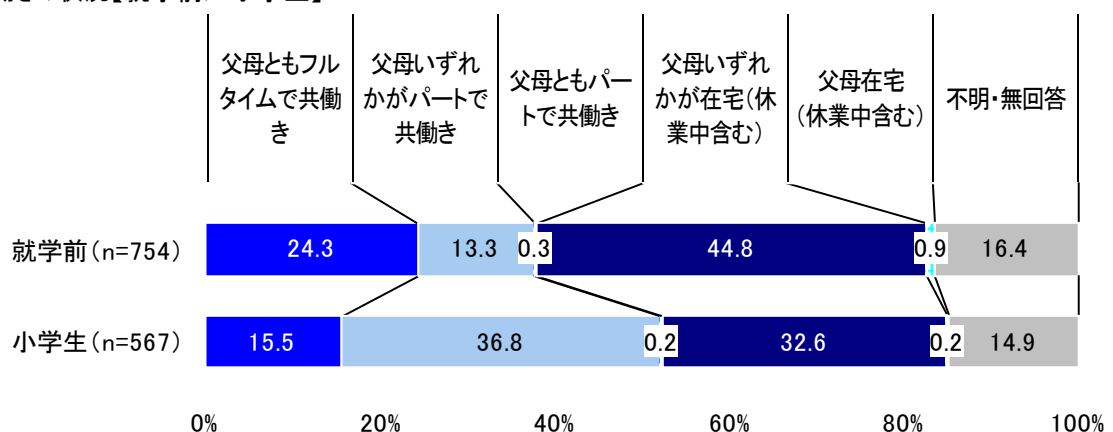
母親の就労状況の変化について見ると、就学前児童保護者は「以前は就労していたが、現在は就労していない」、小学生保護者では「パート・アルバイト等で就労」が最も高くなっています。また、就学前児童保護者では「以前は就労していたが、現在は就労していない」が減少し、「フルタイムで就労」が増加、小学生保護者では「フルタイムで就労」が減少し、「以前は就労していたが、現在は就労していない」に増加の傾向が見られます。

父母の共働きの状況については、就学前児童保護者では「父母いずれかが在宅（休業中含む）」が4割半ばを占め最も高くなっているのに対し、小学生保護者では「父母いずれかがパートで共働き」が高くなっています。

>> 母親の就労状況の変化【就学前／小学生】



>> 共働きの状況【就学前／小学生】



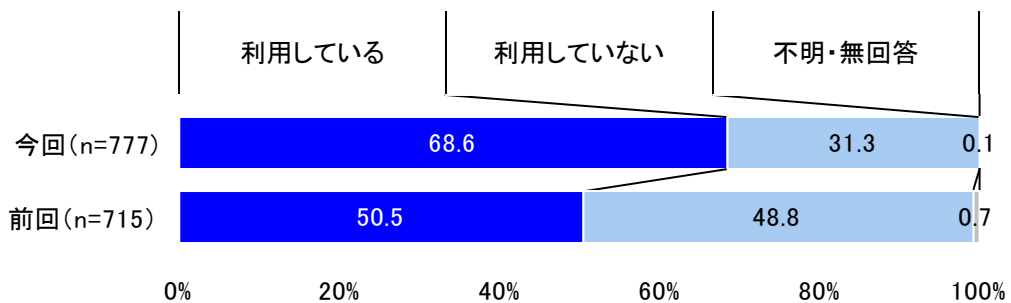
③教育・保育事業の利用について

教育・保育事業の利用状況については、「利用している」が7割弱を占め、「利用していない」を上回っています。5年前に実施した調査と比較すると、「利用している」が15ポイント以上増加していることがわかります。

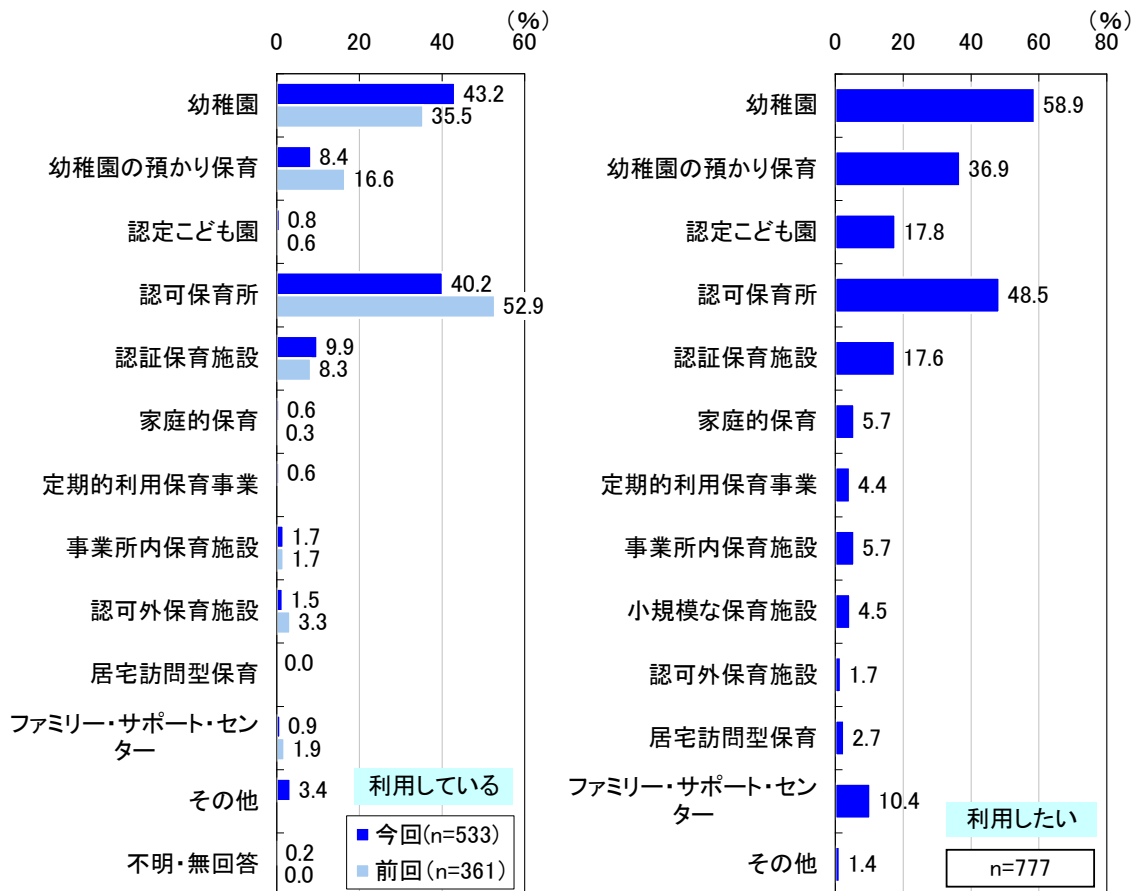
利用している教育・保育事業は、「幼稚園」が最も高く、次いで「認可保育所」、「認証保育施設」となっています。特に、「幼稚園」は前回調査時点よりも8ポイント弱増加しています。

また、今後利用したい事業については、現在利用している事業と同様、「幼稚園」が6割弱と最も高くなっています。

>> 教育・保育事業の利用状況【就学前のみ】



>> 利用している教育・保育事業／今後利用したい事業【就学前のみ】



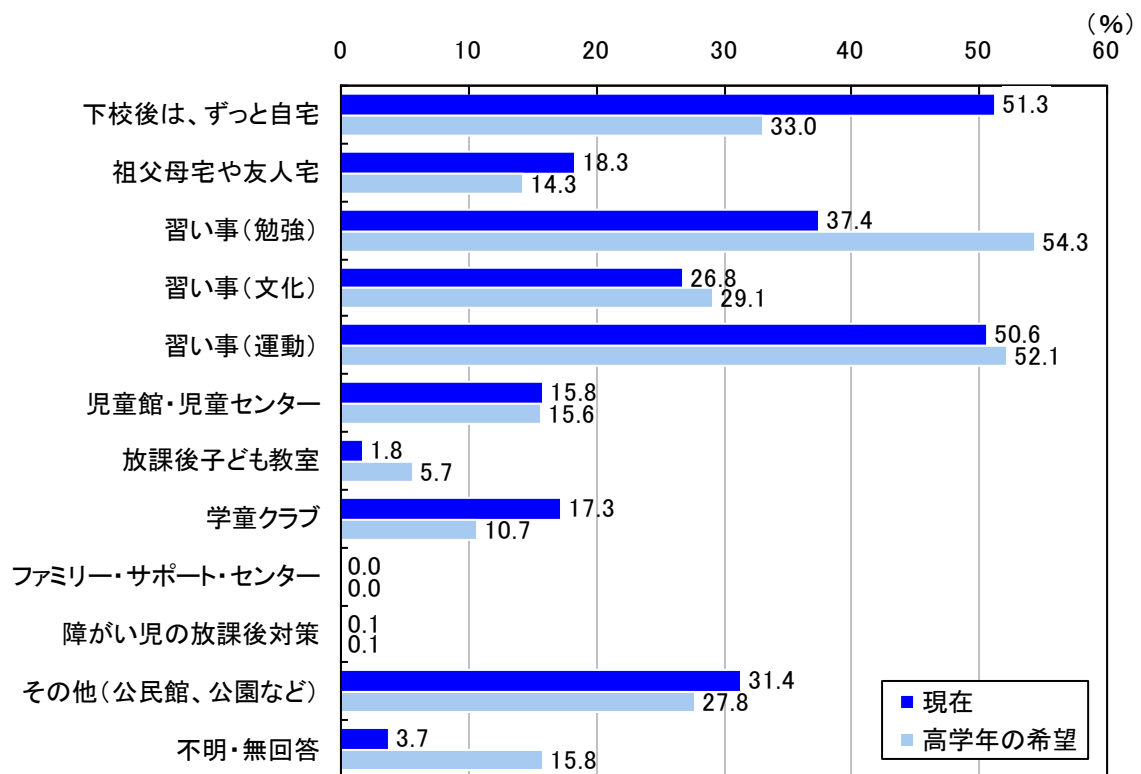
④放課後の子どもの居場所について

放課後の子どもの居場所について、現在は「下校後は、ずっと自宅」が最も高く、次いで「習い事（運動）」となっており、約半数を占めています。また、「学童クラブ」は2割弱となっています。

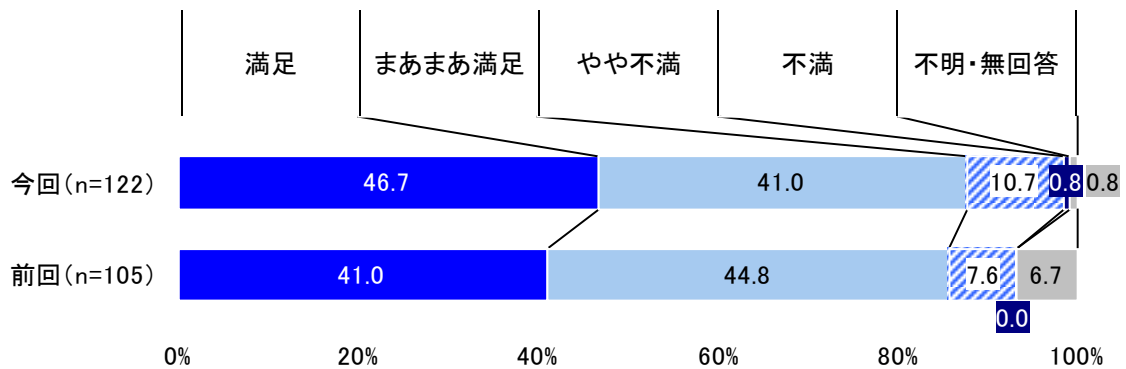
高学年時の放課後に過ごさせたい場所としては、「習い事（勉強）」と「習い事（運動）」が半数を超えて高くなっています。

また、学童クラブ利用についての満足度を見ると、5年前に実施した調査結果よりも「満足」が5ポイント以上増加しており、利用の満足感が高まっていることがうかがえます。

>> 放課後に過ごしている場所、過ごさせたい場所【小学生のみ】



>> 学童クラブの利用の満足度【小学生のみ】

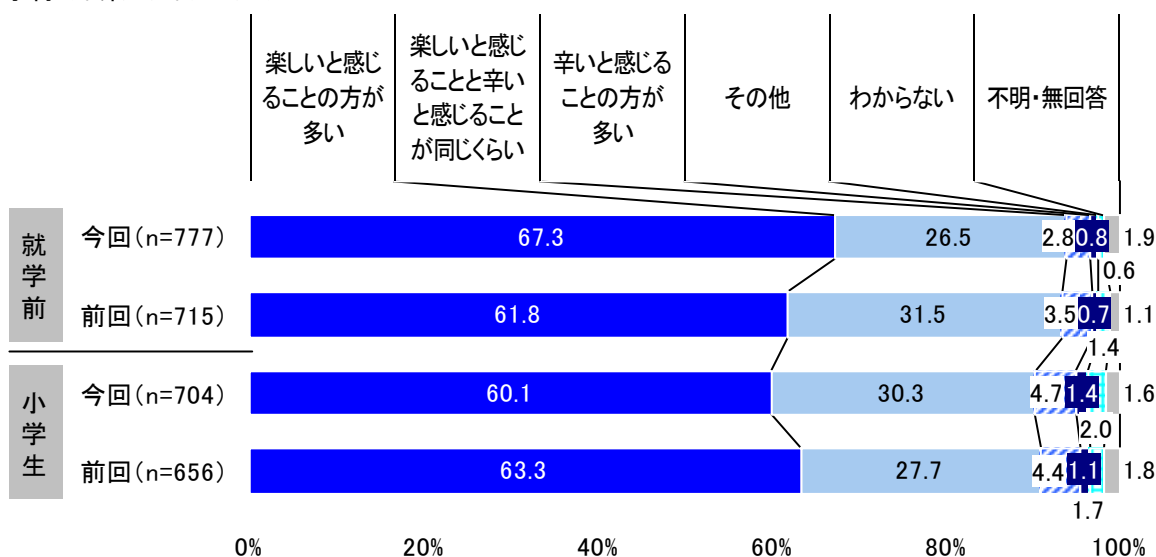


⑤子育て全般について

子育てを楽しんでいるかについては、就学前児童保護者・小学生保護者ともに「楽しいと感じることの方が多い」が最も高く、就学前児童保護者については5年前よりもそのように感じる人が増えていることがわかります。就学前児童保護者と小学生保護者を比較すると、就学前児童保護者の方が小学生保護者よりも「楽しいと感じることの方が多い」と回答した人がやや多くなっています。

また、子育ての感じ方別に見た有効な子育て支援・対策については、就学前児童保護者で共通の項目は「保育サービスの充実」、小学生保護者で共通の項目は「子どもの教育環境」で、年齢や子育てに対する感じ方によって、求める支援や対策が異なることがわかります。

>> 子育てが楽しいかについて



>> 子育ての感じ方別 有効な子育て支援・対策(上位3項目)

	就学前児童保護者			小学生保護者		
	1位	2位	3位	1位	2位	3位
楽しいと感じることの方が多い	子育てしやすい住居・まちの環境面での充実 47.4%	地域における子育て支援の充実 36.5%	保育サービスの充実 36.3%	子育てしやすい住居・まちの環境面での充実 52.0%	子どもの教育環境 39.2%	子どもを対象にした犯罪・事故の軽減 34.8%
楽しいと感じることと辛いと感じることが同じくらい	保育サービスの充実 45.6%	仕事と家庭生活の両立 42.7%	地域における子育て支援の充実 35.9%	子育てしやすい住居・まちの環境面での充実 35.2%	仕事と家庭生活の両立 34.3%	子どもの教育環境 29.1%
辛いと感じることの方が多い	保育サービスの充実 31.8%	仕事と家庭生活の両立 27.3%		子どもの教育環境 30.3%	地域における子育て支援の充実 保育サービスの充実 仕事と家庭生活の両立 21.2%	その他

2 ヒアリングから見る現状

本計画の策定にあたって、アンケート調査の数値では表しにくい子育てに関する実態や思いを伺うため、市内で活動する子育て支援サークル等に協力していただきながら、サークル等の活動や市の子育て支援事業を利用する方に、ヒアリングを行いました。次に、ヒアリングで得られた主な意見を挙げます。

①実施の概要

実施時期：平成26年2月～3月

対象（地域の団体）：子育て支援サークル「ミトンの会」、子育て支援団体「子育て応援者会議」、西東京市パパクラブ（実施順）

対象（市の事業の利用者）：ファミリー学級利用者、学童クラブ利用者（実施順）

②意見の概要

◆在宅で子育てする方への支援について

子どもと参加できるイベント・講習会や、保護者同士で交流できる場づくりが望まれています。行政だけでなく、NPOをはじめとする民間とも連携し、親子が楽しめる場として、また、保護者同士の交流の場として、イベント等を充実させたり、イベント等について多様な媒体を用いて広報する等、官民が連携を密にして対応していくよう検討する必要があります。

- ・在宅で子育てしていると、子どもと離れる時間がほしいと感じるときがある。
- ・働いている親への支援だけでなく、自宅で子どもを育てている親への支援、例えば保育やイベントなどの実施をお願いしたい。
- ・保育付きの講座やイベント、一時保育など、特に専業主婦が、子どもと少しでも離れることができる機会をつくってほしい。

◆家庭での子育ての主体（父親の子育て）について

父母ともに子育てしている割合が6割弱であり、父親の子育て参画も進んできていることがうかがわれます。一方で、子育てに参加できない父親については、参加できない主な理由は、仕事が忙しいことにあります。

父親が子育てに関わるためには、職場での理解と体制づくりが重要です。子育てを夫婦で分担して行うか、家のことは一方に任せるのかは、夫婦間の価値観の問題ではありますが、夫婦で子育てすることも選択しやすいよう、企業等への働きかけが必要となります。

- ・家計の維持が大変で子育てにかかわりにくい男性が多いのは、事実だ。
- ・妻の手伝いではなく、自分がやるべきことという意識が必要だと思う。
- ・父親は、母親に比べて、子どもが生まれる前に子育ての情報を得る機会が少ない。父親も、子どもが生まれる前から、子育ての情報を得て子育ての意識を高めることが大切だ。

◆協働による子育て支援について

子どもと参加できるイベント・講習会や、保護者同士で交流できる場づくりが望まれています。行政だけでなく、NPOをはじめとする民間とも連携し、親子が楽しめる場として、また、保護者同士の交流の場として、イベント等を充実させたり、イベント等について多様な媒体を用いて広報する等、官民が連携を密にして対応していくよう検討する必要があります。

- 妻が妊娠期にあるパパ交流会があれば参加して、実情を情報交換してみたい。
- 妊娠中だが、今から昼間の時間の使い方や育児について、一人で悶々としているのかなど不安がある。
- リフレッシュできる場がほしい。小さい子どもを連れてジャズを聴けるような、子どもが泣いても周りに遠慮しないで、気軽に芸術に触れる機会がほしい。

◆子ども(小学生)の居場所について

低学年で求められる居場所と、高学年の後半で求められる居場所は、同じではありません。

特に高学年後半では、おとなが子どもの居場所を把握できるが、子どもの自主性を阻害せず、自立を支援できるような仕組みが必要です。

家庭、地域、行政が連携し、非常時も含めて子どもが安全・安心に過ごせる場をつくっていくことが重要となります。

- 子どもがどこで過ごしているのか把握しておきたい。しかし、小学校高学年くらいからは、自分でしたいことを言うことができるようになってくる。それが自立の前段階かなと思う。
- 学童クラブのように、学校でも家でもない緩やかな場で、勉強やお稽古事などの特別なプログラムがなく、子どもが自然に過ごせる場所がたくさんあるとよいと思う。
- 子どもが安心できる場、立ち寄れる場、助けを求められる場など、子ども自身が選択できるいろいろな場があると、そのときに一番自分らしくいられる所を見つけられると思う。
- 災害時には、児童館等で、子どもの保護と支援をお願いしたい。



